

## ヘミングウェイ文学の潮流 一人と作品一

## The Stream of Hemingway Literature —Person and Works—

山本 健一

Kenichi YAMAMOTO

## Abstract

Ernest Hemingway (1899-1961) is one of the most significant American writers in the first half of the twentieth century. This paper treats the historical background and the first stage of personal history of Hemingway in the first chapter. In the second through seventh chapter, we analyze the stream of Hemingway's main works, such as *In Our Time* (1925), *The Sun Also Rises* (1926), *A Farewell to Arms* (1929), *Death in the Afternoon* (1932), *To Have and Have Not* (1936), *The Snows of Kilimanjaro* (1936), *For Whom the Bell Tolls* (1939), *The Old Man and the Sea* (1952). In the eighth chapter, we refer to the last stage of Hemingway's life history in terms of his mental disease and physical death as well as his literature world.

Keywords :ヘミングウェイ、非情の文体、戦争文学、作家人生

## はじめに

本稿では、ヘミングウェイの生きた時代を彼個人の歴史と重ね合わせながら、ヘミングウェイ文学の成立から展開、そしてその意義と評価などに関して述べる。特にヘミングウェイの代表的な作品として、*In Our Time*、*The Sun Also Rises*、*A Farewell to Arms*、*Death in the Afternoon*、*To Have and Have Not*、*The Snows of Kilimanjaro*、*For Whom the Bell Tolls*、*Across the River and into the Trees*、*The Old Man and the Sea* などを取り上げ、その人となり、その作品の分析を通して、ヘミングウェイ文学の魅力について検討する。

## 1. 少年時代

## 1.1 シカゴ郊外のオーク・パーク

アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway) は 1899 年 7 月 21 日、アメリカ合州国イリノイ州



青春期まで過ごしたオーク・パークのヘミングウェイの家。著者撮影。

シカゴ郊外の瀟洒な住宅が林立するオーク・パークに生まれた。父クラレンス・エドモンド・ヘミングウェイは実直な町医者であり、母グレイス・ホール・ヘミングウェイは声楽家として近所の子供に教えるほど音楽好きであった。ヘミングウェイ家は、いわゆる中産階級の家環境にあったと言えよう。

父は魚釣りや狩猟を好む性格であり、子供たちのためもあって、この頃、ミシガン州の北部にあるウォールン湖の岸辺に別荘を購入し、夏休み中、釣り、水泳、射撃、狩猟などを子供達に教えながら、アウトドア・ライフを楽しんでいる。

1906 年には、父はオーク・パークに家を新築した。ヘミングウェイはそこから小学校、中学校に通った。そして 1913 年、オーク・パーク高校に進学すると、そこでボクシングやフットボールなどのスポーツに熱中したが、一方で文学に目覚め、古典を読むと共に、学内季刊文芸雑誌「タビュラ」に短編小説などを発表するようになる。しかし、文学は不道徳であるとする保守的な両親との人間関係は悪化していった。

## 1.2 地方新聞の記者として

1917 年 4 月、アメリカ合州国は第一次世界大戦に参戦した。ヘミングウェイは 18 歳の高校卒業を前にして、第一次世界大戦下のヨーロッパ戦線で兵役に従事したいと考え、志願するが、身体検査で不合格となる。それでもなお、親の勧める大学進学を拒否し、ミズリー州カンザス・シティにある「カンザス・シティ・スター」という地方新聞社の記者の職を得て、文章を書く仕事を始める。1 年足らずではあったが、

新聞紙上に記事を掲載する傍ら、文章の書き方や表現の技術に関する訓練を通して、作家という仕事への志向を強めたようである。

## 2. 青年時代（作家修行時代）

### 2.1 第一次世界大戦への参戦

1918年（19歳）4月、「カンサス・シティー・スター」社を辞職した後、イタリア軍の赤十字要員としてミラノに到着。救急車の輸送員として北イタリア前線フォッサルタに従軍中、敵の迫撃砲攻撃と機銃掃射で脚部に負傷し、ミラノ陸軍病院に3か月入院した。そこで看護婦として働いていたアグネス・フォン・クロスキーと知り合い、恋愛関係に陥るが、この体験が後の小説『武器よさらば』（1929）で描かれることとなる。後に従軍の功績により、彼はイタリア政府から勲章を受章した。

### 2.2 パリ時代と *In Our Time* 『われらの時代に』 1925

1919年（20歳）生まれ故郷のオーク・パークに戻ったが、戦場で負傷した時の後遺症で不眠症に悩むようになった。

翌1920年からは、カナダのオンタリオ州トロント市に移り、「トロント・スター・ウィークリー」誌や「トロント・デイリー・スター」新聞の記者やシカゴの「シカゴ・トリビューン」新聞の事件記者を体験したりした後、1921年（22歳）には、作家シャーウッド・アンダーソンやシカゴ・ルネッサンス・グループとの交流があり、また8歳年上の女性ピアニスト、エリザベス・ハドリー・リチャードソンと結婚し、創作活動に励むようになる。

1922年（23歳）には、アンダーソンの紹介で、パリに渡り、アメリカ人女性作家ガートルード・スタインや詩人で批評家でもあるエズラ・パウンドとも知り合い、二人から短編小説の文体や表現技法を学ぶこととなった。

このようなパリにおける修業時代を過ごした後、1924年（25歳）、スリーマウンティンズという出版社から短編など18編を集めたパリ版『われらの時代に』を出版し、アメリカ人批評家のエドモンド・ウイルソンに好意的な評価をもらった。

夏にはスペインを旅行し、パンブローナで毎年行われるサンフェルミンの闘牛祭りで闘牛の魅力に取りつかれた。この体験が後の作品『日はまた昇る』（1929）に取り上げられることになる。

ヘミングウェイは、1918年、19才のとき、赤十字隊員として、第一次大戦下のイタリア戦線に参加した。そこで砲弾の炸裂する音に恐れながら、戦闘で負傷したり、あるいは死んだりした兵士達の姿を見つづけ、また自分でも重傷を負うことによって、およそ平凡な日常生活では体験することのできない人生の一面（死と暴力の前に、いとも簡単に崩壊してゆ

く生）を深く心に刻みつけるのである。大量殺人の場である戦争は、彼の考え方に大きな影響を与えたにちがいない。

1925年に出版された処女短篇集、『われらの時代に』（アメリカ版）は、彼がそのような体験から得た人生の実相を定着させたものである。

『われらの時代に』には、十数篇の短篇が含まれているが、それぞれにエピグラフ風の短いスケッチが付けられている。それらはおもに戦場での戦闘場面や、ペインでの闘牛などに関する文章であり、ほとんどが死についての描写である点で共通している。それら死と暴力に色どられたスケッチは各短篇に暗い影を落とし、われらの時代に平和などあり得ないと主張しているかのようだ。

一方で、『われらの時代に』の作品中には、湖の水、ツガの森、松林の柔らかな大地、冷たく透き通った川の流れ、流れに逆らって泳ぐ鱒など、豊かな自然描写が頻出するが、これらはすべてある方向へ向かっている。すなわち、original nature（初源の自然）という方向である。

そしてこの original nature とは、我々人類が苦悩と汚辱に満ちた現実の世界から常に希求する理想であり、ユートピアであり、神話に他ならない。であるとすれば、新たな生命を生み出す場所であり、聖化された場所であり、我々が最終的に帰っていく場所でもある。同時に、我々は original nature（初源の自然）の背後には、他者に対して違和感を感じてしまう現実の世界が表裏一体の世界としてぴったり張り付いており、決して消滅することがないということも知っている。

初源的な自然との一体化、神話、幻想との同化への、このようなニックの強い志向は、彼のいた現実の世界がいかに閉塞的で出口のない世界であったかを裏側から映し出しているとも言えよう。

## 3. 第1次世界大戦と戦争体験

### 3.1 *The Sun Also Rises* 『日はまた昇る』 1926

1926年（27歳）10月に『日はまた昇る』が出版されるやベストセラーとなり、ヘミングウェイは作家として好意的な評価を受ける。1918年、ヘミングウェイは第一次大戦下のイタリア戦線に従軍した。そこで仲間が次々に戦死し、自らも重傷を負うという体験を通して、人間の生の無意味さと不条理性を強く認識する。一方、アメリカ本国は漁夫の利を得て、戦後の景気に沸いていた。戦場での破壊と暴力と死をくぐり抜けてきた若者にとって、そのことは旧制度と権威に対する強い不信でもあり、また人類の歴史と伝統への幻滅でもあった。

1926年に出版されたヘミングウェイの *The Sun Also Rises* は、このような第一次大戦が生みだした1920年代の混迷した時代に生きる若者たち、いわゆる“Lost Generation”（失われた

世代)の青春白書である。T. S. Eliotの詩“The Waste Land”にも比すべき、時代の虚無の深さのなかを彷徨する青春群像の真の姿をとらえつつ、それでもなお救いを求める道は可能なのかどうか、もし可能であるとすれば、いかなる方法が可能か、その点に視点を当てながら、ヘミングウェイは当時の青春群像の倫理意識を探究している。

かつて世界に神が君臨し、社会の構造も不自由ながら安定していた時代には、どの階層に生きる人間にもそれなりの生きる目標なり、目的があったはずだが、19世紀になって、いわゆるニーチェの「神は死んだ」という言葉に代表されるように、自然科学の隆盛と近代市民社会の発達に伴って、絶対的価値の基準であった神の代わりに、人間がその座に着くようになった結果、われわれ現代人は価値観の相対化に悩み、生きる目的を見失うという状況に直面している。それがジェイクとブレットを取りまく状況なのだが、彼らはそのような深い虚無のさなかを彷徨しながらも、その現実から眼をそらさず、神に代わる新しい価値を、新しい倫理を見つけだそうと意識しているのだ。

食事を終えたあと、二人を乗せタクシーはマドリッドの大通りを走る。ジェイクは彼女の肩に腕をまわし、ブレットは彼に寄りかかる。陽光は輝き、家並みが白く眼にしみる。初めて、彼らはお互いに心が通い合う気持ちになっている。

“Oh, Jake,” Brett said, “we could have had such a damned good time together.”<sup>(1)</sup>

“Yes.” I said. “Isn’t it pretty to think so?”

「私たち、一緒だったら楽しかったでしょうね。」

「うん、そう考えるのもすてきじゃないか。」

ブレットの言葉が仮定法でしか表現され得なかったように、彼らの過去は、今まで見てきた如く、虚無と不安のなかをさまよいながら、愛も成就することがなかった。それはまさに、エピグラフにある Gertrude Stein の “You are all a Lost Generation.” (失われた世代) という言葉そのものではなかったか。そうであるかぎり、彼らに救いは全くないように思われる。がしかし、ジェイクは「そう考えるのもすてきじゃないか。」と言うことによって、自分たちが失われた世代の一員であることを直視し、その事実を認めてゆこうとしている。エピグラフに引用された旧約聖書の「伝道の書」の一節のように、人は行きて帰らぬ虚しい存在であり、すべては空の空であるという人の世の現実をも認めようとしている。時代の虚無の深さを見つめながら、それを自己の運命として引き受けようとしている。そこには自己の運命を呪い、後悔する態度もみられないし、湿っぽさも感傷もない。彼らの気持は白く輝くスペインの大地のように乾いている。そういう態度に “Lost Generation” としての、彼らのひたむきさと誠実さと力

強さがある。それは、いまだ明確な救済の思想にまで深められてはいないが、少くとも、過酷な現実を前にして、従来の宗教や哲学及び既成の権威や制度の有効性を否定しようとするヘミングウェイの姿勢を提示すると同時に、それらに代わるべき新たな行動の規範をめざすしかないという、彼のストイックな倫理意識をも示していると思われるのである。

### 3. 2 A Farewell to Arms 『武器よさらば』 1929

1918年、ヘミングウェイは第一次大戦下のイタリア戦線に従軍した。そこで仲間が次々に戦死し、自らも重傷を負うという体験を通して、人間の生の無意味さと不条理性を強く認識する。この体験は、『武器よさらば』(1929)の主人公、フレデリック・ヘンリー中尉 (Frederick Henry) の体験となって語られている。

彼は憲兵に追われ、川に飛び込み、戦線から脱走してしまう。脱走罪で追われる身になった彼は、恋人のキャサリンと再会し、手に手を取ってスイス山中に身を隠す。この逃亡は現実の世界(戦争)から、理想の世界(山奥の愛の生活)への跳躍を意味する。しかし孤立した二人だけの生活が永遠に続くはずもない。二人の間に、第三者が赤ん坊の形で侵入してくるとき、二人は現実の世界へと引きもどされる。出産準備のため、二人は山(理想的愛の世界)を降り、ふもとの町(現実の世界)へやってくる。このころフランスではドイツ軍の攻撃が始まっていた。三日間も雨が降り続き、道路も雪どけの水で泥たまりと化している。ヘミングウェイはさり気なく、「戦争」、「雨」、「泥たまり」などを描きこむことで、二人が山(理想的愛の世界)から平地(現実の世界)へもどってきたことを暗示している。さらに二人の暗い予感(なにかにせきたてられるような感じ)をも描き忘れてはいない。

やがて陣痛が始まり、キャサリンは入院する。しかし難産で、彼女は苦しみ抜く。やがて子供が産まれるが、すでに死んでいた。皮肉なことに、二人の愛は、現実の世界では、生命ではなく、死を誕生させるのである。死産した子供のこと、そして死の床で苦しみ続けているキャサリンの姿を想い浮かべながら、フレデリックは死がいわれなく (gratuitously) 人を襲うものだと、強く感じている。彼はアイモ(味方に殺された彼の同僚)の死や、間近にせまったキャサリンの死が、不当な仕打ちだと考えている。アイモの死、子供の死、そしてキャサリンのせまりくる死の「いわれなさ=不条理」にとまどっている。自分をとりまく世界の像が焦点を結ばず、かろうじてその無意味さに耐えている。そしてフレデリックの願いも虚しく、ついにキャサリンは出血多量で死んでゆくことになる。

エンディングにおいて主人公フレデリックの内的成長の軌跡にポイントを置き、彼の自己認識を中心とする観点から見

れば、戦争に参加したフレデリックが体のみならず、精神的にも大きな傷を負い、さらに愛する女性をも失なうということも重なって、精神的挫折を体験するが、その体験が彼を生きのびさせ、強く鍛えることになる。つまり戦争とは、自己の存在とは、人生とは何かということを学んだために、彼は強くなったのである。我々現代人はフレデリックの逃げまどう姿に、未来への vision を見失った現代を生きる悲劇的人間像を見出す一方で、打たれ強く成長した新たな人間像に共感を寄せるのではないだろうか。

#### 4. スペイン・キューバ・アフリカ

##### 4.1 *Death in the Afternoon* 『午後の死』 1932

ヘミングウェイは1931年(32歳)夏にスペインを旅行し、多くの収穫を得て、1932年(33歳)、闘牛の入門書とも呼ばれる『午後の死』を出版する。

ヘミングウェイは内なる声にせかされながら、終生旅を続けた。一か所にしばらく定住の形を取ることもあったが、その間もさまざまな国や土地を訪れている。第一次世界大戦の風に誘われ、イタリア、フランス、スペイン、ギリシャ、スイスなどの地を踏んだ。*In Our Time* はパリでなければ書かれなかっただろうし、*The Sun Also Rises* はスペインのパンブローナのフィエスタに出会わなければ、書かれることもなかったはずだ。同様にマドリッドの闘牛にあれほど心を惹かれることがなければ、*Death in the Afternoon* も日の目を見ることはなかっただろう。すなわちヘミングウェイの場合、地理的条件(土地、風土、気候、文化、歴史、国民性など)が作家に与えた影響は、思いのほか大きかったのである。

『カタロニア讃歌』(*Homage to Catalonia*)を書いたジョージ・オーウェルや『カタルーニア讃歌』を書いた堀田善衛にしても、スペインに対する愛情を人一倍持ちながら、闘牛そのものにはそれほど関心を怠っている訳ではない。それが普通人の常識だと考えられるが、ヘミングウェイはそういう常識は意にも介さず、スペイン=闘牛=死=悲劇という、



フロリダ州キー・ウェストのヘミングウェイハウス。著者撮影。

いささか主観的にすぎる図式を自己の出発点にして、スペイン論、闘牛論、人生観、死生観、さらには芸術観、文学観に至るまで、熱に浮かされたように描いている。

スペイン、特に闘牛に対するヘミングウェイの思いこみの激しさは、従来の感情を抑制した文体を創造した作家にはみられなかった傾向なのである。この変貌ぶりは結局のところ、ヘミングウェイがスペインの風土、国民性、そして闘牛などのスペイン文化にいかにも大きな衝撃を受け、またその文化と歴史の中にいかに自己の文学の核心を(たとえそれがスペインへの誤解から生じたものであったとしても)見いだしたかという、見逃すことのできない事実を如実に物語っていると考えられるのである。

##### 4.2 *To Have and Have Not* 『持つと持たぬと』 1936

ヘミングウェイには珍しい社会派小説である *To Have and Have Not* (1936) は、1930年代という大不況の時代 (the Great Depression) と密接に関連している。1929年、ニューヨークのウォール街からはしまった経済恐慌の波は、またたく間にアメリカ全土に拡大し、1920年代の繁栄を享受していた国民の多くは職を失い、大不況の時代の暗い影に生活をおひやかされていた。

この波はヨーロッパにも深刻な経済不況をもたらし、前途不明の不安の中からドイツではヒトラー政権、スペインではフランコ政権、イタリアではムッソリーニ政権などのファシズムが、勢力を増大しつつあった。他方、この台頭するファシズムに対抗すべく、共産主義思想もまた世界中にその根を張りはじめていた。例えばアメリカでも急進派の雑誌 *New Masses* (1926-48) などのプロレタリア文学も盛んになっていた。

1933年頃、キューバでは独裁者ヘラルド・マチュードを倒そうとする左翼の革命運動が高まりを見せていた。スペインにおいてもすでに1931年にはスペイン革命が起り、スペイン共和国が樹立されていたのをヘミングウェイは強い関心をもって眺めていた。キューバ革命にもスペイン革命にも彼は直接参加することはなかったが、彼は彼なりの見方で、世界の変化する情勢をできるだけ距離を保ちながら見つめていたのである。

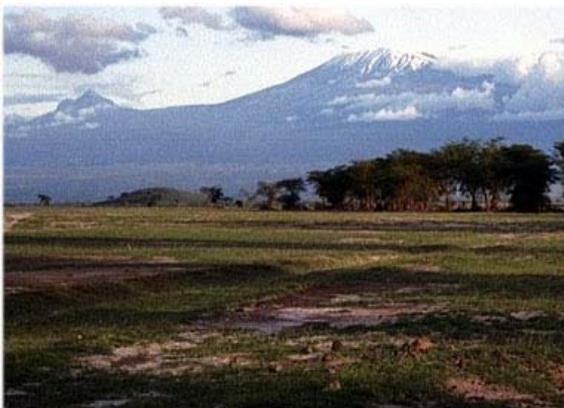
もともと *To Have and Have Not* という題名は、「持てる者」すなわち金持と、「持たざる者」つまり貧乏人という二項を対立させ、その対比を強調しようとする企てなのだが、この小説の最終場面でハリー・モーガン (Harry Morgan) が死ぬ間際に、“One man alone ain't got. No man alone now.”<sup>②</sup>、「一人ではだめだ」とつぶやく有名な文句があり、どの批評家もこの部分からこの作品の中心的主題を汲みとっているが、このことばがハリーの連帯 (solidarity) への意志と読み取ることに、

少々のためらいを禁じ得ないのである。つまりヘミングウェイに *solidarity* への意志があったとしても、表現形式が必ずしも伴っていないのではないだろうか。

この作品全体を通していえることだが、ハリーの戦うべき相手は一体誰なのか。その相手が見えてこないもどかしさがある。確かにハリーはキューバ人の革命家たちと銃撃戦の末、射たれて死んだ。では彼の戦うべき相手は彼ら革命家たちであったのか。そうではあるまい。彼らはハリーと同じ貧乏人であり、むしろ連帯すべき相手であったはずだ。では金持連中がハリーの立ち向かうべき相手であったのか。それも考えにくい。ハリーは富の不公平を嘆きはするが、革新主義者のように階級闘争の政治意識をもって金持連中を見てはいないし、そんな意識を持つことさえできないタイプの人物なのだ。

*To Have and Have Not* の第3部を書いていたのは1936年であり、この頃スペインではスペイン戦争が起っていた事情はすでに述べた。おそらくヘミングウェイはスペインの統一戦線のような集団のもつ連帯意識を頭に思い浮かべて“*One man alone ain't got. No man alone now.*”とハリーにつぶやかせていたのだろうと考えられるが、この小説全体では彼の意図が必ずしも成功したとは言えないと考えるほうが、むしろ納得がゆくのである。いずれにしても“*solidarity*”を体現する人物は *For Whom the Bell Tolls* のロバート・ジョーダン (Robert Jordan) を待つしかないのかもしれない。ジョーダンの造形にはハリーを必要としたのだろう。

いろいろ欠点を待った作品ではあるが、多くの批評家たち (例えば Carlos Baker や Stewart Sanderson によくあらわれている) の一致する点は、そのような欠陥にもかかわらず、個人同志の連帯が全体の幸福を産みだすという人道主義的な作品の中で展開された主題が、やがては *For Whom the Bell Tolls* の中の主人公ジョーダン (一人ではなく、仲間と共に絆を強く結びながら、自己の信念に生命をかけることのできる精神的成熟を備えた人間像) へと発展してゆく可能性を確認して



アンボセリ国立公園からキリマンジャロを望む  
<http://www8.big.or.jp/~ishizumi/5summit/>

いるが、そのようなパースペクティブの中に置いてみれば、確かにこの *To Have and Have Not* は決して無視することのできない重要な位置を占めているといえよう。

#### 4.3 *The Snows of Kilimanjaro* 『キリマンジャロの雪』1936

1936年37歳の時、アフリカを題材とした短編『キリマンジャロの雪』や妻に対する屈託を描いた短編『フランシス・マコーマーの短くも幸福な生涯』を発表した。

ヘミングウェイは見知らぬ外国の地にあこがれ、それらの土地を旅した。イタリアのミラノ、フランスのパリ、スペインのマドリード、キューバのハバナ、そしてアフリカはケニアのナイロビ、タンザニアのセレンゲッティなど、様々な土地における異文化体験を大胆に作品のなかに取り込んでいった。例えば、ヘミングウェイ作品に描かれたアフリカの草原と、そこから天に向かってそびえ立つキリマンジャロの白く輝くその頂とのコントラストは、あまりに強烈であり、まぶしいほどである。このまぶしさはどこから来るのであろうか。

これまで“*The Snows of Kilimanjaro*”に関して、1950-60年代の実存主義の立場 (マニーの主張) からの批評、1960-70年代の構造主義の立場 (レヴィ・ストロースの主張) からの批評、1970-80年代のポストモダニズムの時代における立場 (リオタールやデリダの主張) からの批評などがあつたが、この作品を通して我々は、アフリカの大地とキリマンジャロの白い頂が、人種問題、植民地問題、動物保護の問題、アフリカに存在する国家群の独立、経済問題、奴隷制、植民地主義、少数固有文化の破壊、独善的キリスト教布教政策など、西欧文化に対する厳しい批判に関する諸問題を考える契機になってきたこと、また同時に、主人公ハリー・ストリート (Harry Street) という一人の人間が、酒、女、遊び、怠惰、傲慢、安楽、保身などのために作家としての才能をすり減らし、人間としての魂と良心まですっかり腐らせたことに苦悩し、それでも、彼は作家としてもう一度優れた作品を書きたいと強く願うという、常に理想を追い求め続ける人間の姿を垣間見てきた。またこのような重層的に入り組んだ問題を我々に提示し、同時に深化させ得たのも、この作品の尽きせぬ魅力となっている。

#### 5. スペイン戦争: *For Whom the Bell Tolls* 『誰が為に鐘は鳴る』1939

1936年にフランコ反乱軍と共和国との間でスペイン戦争が始まると、1937年3月、ヘミングウェイは共和国側を支援するために“*The Spanish Earth*”という記録映画をつくっている。

1938年には戦乱激しいスペインへ向かい、戦闘状況を観察したりしているが、1939年3月にはフランコ側の勝利に終り、

同年9月、第二次世界大戦へ突入するという国際情勢の中、*To Have and Have Not* で扱われた主題がさらに深められ、1940年10月には *For Whom the Bell Tolls* へと発展されてゆくことになるのである。

*To Have and Have Not* におけるヘミングウェイの迷いも、*For Whom the Bell Tolls* に至ると社会に対するより明確な態度として表れてくる。*To Have and Have Not* の主人公ハリー・モーガン (Harry Morgan) は政治的に混乱するキューバを舞台に、生活のためなら密輸業者にもなり、必要ならば平気で人を殺す悪党ぶりをみせつけはするのだが、いかんせん、あまりの粗雑さ故に、自己の政治的見解を理念化するのもむずかしいという人物であるのに対し、*For Whom the Bell Tolls* におけるロバート・ジョーダン (Robert Jordan) はアメリカの大学でスペイン語の教師をしており、愛するスペインの地がファシストたちに支配されてゆくのに憤りを覚え、

... and he believed in the Republic and that if it were destroyed life would be unbearable for all those people who believed in it.

He was under Communist discipline for the duration of the war.

(3)

と、政治的信念を表明することのできる主体性を備えた人間像であるという点で、*To Have and Have Not* よりも批会性と自己犠牲の精神を文学の中に取り入れようとするヘミングウェイの意識が、この作品の世界を共感に充ちた、豊かなものにすることに成功している。

さらに全体的な観点から *For Whom the Bell Tolls* の魅力をつけ加えるならば、それはヘミングウェイのスペインなるものへの愛の深さに尽きると思われる。スペインの大地、白い山並み、青い空、スペインの酒、料理、素朴で親切で暖かく、それでいて平気で人を裏切り、残酷で勇敢な、ピラール、パブロ、アンセルモそしてマリアといったスペインの人々を愛する愛情があり、まわりをとりまく具体的な世界が信じられてこそ、イデオロギーもファシズムへの抵抗も、また連帯の意識も、命を賭してまでも守ろうという自己犠牲への信念へと結晶してゆくのであり、その点で、たとえハードボイルド (非情) な文体が後退していったにしても、その



Hemingway in 1939

[http://en.wikipedia.org/wiki/Ernest\\_Hemingway](http://en.wikipedia.org/wiki/Ernest_Hemingway)

欠点を補ってあまりある内容の豊かさと掘り込みを獲得し得たと評価し得るのである。

## 6. 第2次世界大戦： *Across the River and into the Trees* 『河を渡って木立の中に』 1950

1950年 (51歳)、小説『河を渡って木立の中に』を出版した。創作活動において約10年間の空白期間の後に発表された作品であったが、評価は芳しいものではなかった。

ヴェニスへやってくる途中、主人公キャントウェル大佐 (Cantwell) はフォッサルタの町へ寄る。そこは30年前、第一次世界大戦の戦場となった場所であり、彼が重傷を負った場所であった。そしてその川の土手へやってくる、正確にその負傷した場所をつきとめ、そこで便をする。

負傷した場所に便をするという思わせぶりな行為は、例えば Philip Young が “primitive ceremonial”<sup>(4)</sup> といい、また Samuel Shaw が “a ritual act”<sup>(5)</sup> といっているように、明らかに「儀式」を思わせる行為である。儀式でなければこれほど手のこんだ仕方にこだわる必要もない。それは死の儀式、自分の死を自分で取り行う儀式なのだ。儀式としての象徴的な死を体験して、彼は再生を願うのである。事実、便をした後、その穴へ1万リラ紙幣を埋めて、記念碑 (Monument) とするのである。

便と金、血と鉄でできた記念碑とはまさに彼が生まれた father land” (祖国) であり、同時に彼が死ぬべき場所、すなわち彼の墓なのだ。死と再生の儀式を終え、このフォッサルタの地が聖なる地と化した今、彼はついに死ぬことができる。彼はずいぶん長い間 “a pilgrimage to Fossalta” (フォッサルタへの巡礼) を続けてきたのである。In Our Time から *Across the River and into the Trees* に至るまでの受苦に満ちた旅を今こそ終えることができるのである。

キャントウェルは老いることに不安を覚え、老いの延長線上に死の影を見つけ、それに怯えていたのであるが、フォッサルタへの巡礼の旅を終え、自分の墓標としての記念碑を建てることによって、死と再生の儀式を取り行うことができた結果、今や彼は自分の老いを冷静に見つめ、受け入れようとする。それゆえ彼は、ジャクソン将軍が言ったように、こちら岸 (現実の世界) から河を渡って向こう岸の木立の中で、現実の生の営みに疲れた魂に永遠の休息を与えようとするのである。

今まで見てきたように、この作品は確かに多くの欠点もっている。だが、老いの問題と直面し、そのせまりくる死の予感に苦しみながらも、結局その老いを、また死を受容してゆくキャントウェルの態度には、Nick Adams 以来のヘミングウェイ・ヒーローたちが常に死の予感と戦いながら提起してきた問題に対する解答が、ひとつの明確な形として語られて

いると考えられるのであり、さらにこの作品でたどり着いたヘミングウェイ世界の展望が2年後の *The Old Man and the Sea* となって結実するという事実を思い合わせると、この作品におけるヘミングウェイの意図も十分達成され得たのではないだろうか。

### 7. 海と大魚と老人: *The Old Man and the Sea* 『老人と海』 1952

1952年(53歳)、雑誌「ライフ」に『老人と海』を掲載後、単行本も出版した。年老いた漁師サンチアゴの巨大なマカジキとの死闘を描いたこの作品は、ピューリッツァー賞を受賞した。

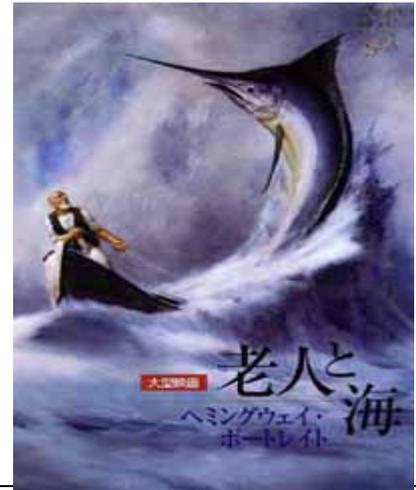
このようにして、*In Our Time* の Nick Adams の冒険から始まった旅は、Jake Burns、Frederick Henry、Robert Jordan そして Santiago の旅、すなわち *The Old Man and the Sea* において生と死をも包み込む源として、その冒険の旅を終えたのである。ヘミングウェイはこのテキストにおいてついに彼の到達すべき地点にたどり着いたのだ。彼がずっと追求してきたヒロイズムは *The Old Man and the Sea* において、アメリカの歴史を貫いてきたアメリカン・ヒーローの神話として完成をみたのである。

それは同時に、「海と巨大な魚と人間」のイメージを通して、メルヴィルの *Moby-Dick* から *The Old Man and the Sea* に至るアメリカ探求の物語の完成でもあった。そしてこのアメリカ探求の物語は、ブローティガンの *Trout Fishing in America* において、「断片化された小川と瀕死の鱒」のパロディ的イメージで、更に受け継がれてゆくことになる。

Tony Tanner は *City of Words* の中で、「自分の本を *Moby Dick* の解釈ではじめて、Richard Brautigan の *Trout Fishing in America* の考察で結びたい。なぜなら、両者は調子も手法も異なっているが、いずれもアメリカの探求 (an American quest) を主題としているからだ」<sup>(6)</sup> と述べ、*Moby Dick* から *Trout Fishing in America* を貫いて流れるアメリカ探求の主題を指摘している。

*Trout Fishing in America* は今はもう失われてしまったくアメリカの鱒釣り>の夢を求めて行く者たちの quest すなわち、探求の形を取っており、その点においては伝統的な探求の物語の系譜に位置しているが、この物語の中には、白鯨や Marlin のような巨大な魚は死に絶え、神話的なあるいはコスモロジカルなシチュエーションは姿を消し、その代わりにパロディ的なシチュエーションが台頭してきている。あらゆる生命(白鯨や Marlin など)を育んだ豊かな海は、ばらばらに裁断されて小川に姿を変え、またかつては神秘的な生命力に包まれていた大魚(「大きな物語」)は、生命力を失い、絶滅の道をたどる鱒(「小さな物語」)へと変貌してしまった。

海と大魚と人間がともにひとつになり、世界がその全体性を保持していたのは、ヘミングウェイの *The Old Man and the Sea* までである。それ以後は、<失われた白鯨>の夢または<失わ



<http://www7.plala.or.jp/oldsea/oldsea1.html>

れた大魚>の夢、あるいは<失われた鱒釣り>の夢、を追いかけて放浪するしかない。だがこの放浪は、アメリカの夢への単なるノスタルジーではなく、アメリカの夢がすでに失われてしまったことを確認した上で、なおその失われたアメリカの夢をパロディやパラロジといつた「小さな物語」<sup>(7)</sup>として生き抜こうとする現代人のテキスト生成行為の一つであり、*The Old Man and the Sea* というテキストはアメリカン・ヒーローとしての神話性を喪失しても、なお新たなテキストを生成し続けていくことだろう。

### 8. 病いと死

1954年(55歳)にウガンダのナイル河上流で飛行機墜落事故に遭遇し、一命はとりとめたが、内臓破裂などの重傷を負い、それ以後、肉体的不調を訴えるようになる。

同年4月には米国アカデミー賞受賞、10月にはノーベル文学賞を受賞したが、体調不良のため、授賞式には参列できなかった。

1959年(60歳)にはキューバ革命が勃発し、ヘミングウェイはキューバでの居住に不安を覚え、ノイローゼ気味になる。

1960年(61歳)になると、結局キューバを去り、アメリカ合衆国アイダホ州ケチャムに住居を移したが、ノイローゼ治療のため、11月にはミネソタ州ロチェスター市メイヨー・クリニックに入院した。

1961年(62歳)、入退院を繰り返した後、アイダホ州ケチャムの自宅に帰りはしたが、翌日の7月2日に死亡した。猟銃の手入れ中に暴発したための事故死と公式には発表されているが、銃による自殺の可能性が高いとされている。

### 終わりに

以上、ヘミングウェイの生きた時代を彼個人の歴史と重ね合わせながら、ヘミングウェイ文学の成立から展開、そして

その意義と評価などに関して述べてきた。特にヘミングウェイの代表的な作品として、*In Our Time*、*The Sun Also Rises*、*A Farewell to Arms*、*Death in the Afternoon*、*To Have and Have Not*、*The Snows of Kilimanjaro*、*For Whom the Bell Tolls*、*Across the River and into the Trees*、*The Old Man and the Sea* などを取り上げ、その人となり、その作品の分析を通して、ヘミングウェイ文学の魅力について検討した。

このように、ヘミングウェイ文学は 1920 年代、さらには 20 世紀前半のアメリカ文学を代表する大きな潮流であり、未だに多くの人々に愛読され、大切に読み継がれてきたことは、上記のとおりである。今後も彼の文学は人々の心の奥底に生き続け、新たな世界を生成し続けることであろう。

## 註

- (1) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's Sons, 1926), p.247.
- (2) Ernest Hemingway, *To Have and Have Not* (New York: Charles Scribner's Sons, 1937), p.225.
- (3) Ernest Hemingway, *The For Whom the Bell Tolls* (New York: Charles Scribner's Sons, 1940), p.163.
- (4) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1966), p.120.
- (5) Samuel Shaw, *Ernest Hemingway* (New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1973), p.109.
- (6) Tony Tanner, *City of Words* (London: Jonathan Cape, 1979), p.414.
- (7) J. F. Lyotard は、*La conditione postmoderne* (Paris: Editions de Minuit, 1979) の中で、人類の進歩、自由と解放、そして主体といった、啓蒙主義からマルクス主義にいたる概念（「大きな物語」）がその効力を失い、「大きな物語」の論理の破綻に対する不信感が増幅している状況を前にして、ハーバーマス流の専門家たちの *homologie*（議論による普遍的コンセンサスの追求）ではなく、発明家たちの *paralogie*（言語ゲームの異型性の承認と規則の異質性、相違・対立の追求）という「小さな物語」が乱反射するポストモダンの状況をアイロニカルに肯定しようと試みている。
- (8) Ernest Hemingway, *Men Without Women* (New York: Charles Scribner's Sons, 1927)
- (9) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929)
- (10) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (New York: Charles Scribner's Sons, 1932)
- (11) Ernest Hemingway, *Winner Take Nothing* (New York: Charles Scribner's Sons, 1933)
- (12) Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Charles Scribner's Sons, 1935)
- (13) Ernest Hemingway, *To Have and Have Not* (New York: Charles Scribner's Sons, 1937)
- (14) Ernest Hemingway, *The For Whom the Bell Tolls* (New York: Charles Scribner's Sons, 1940)
- (15) Ernest Hemingway, *Across the River and Into the Trees* (New York: Charles Scribner's Sons, 1950)
- (16) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952)
- (17) Ernest Hemingway, *A Moveable Feast* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964)

## 2. 主要研究書

- (1) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: The Writer as Artist* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1952)
- (2) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1966)
- (3) Earl Robit, *Ernest Hemingway* (Boston: Twayne Publishers, 1963)
- (4) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969)
- (5) Samuel Shaw, *Ernest Hemingway* (New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1973)
- (6) Sheldon Norman Grebstein, *Hemingway's Craft* (Southern Illinois University Press, 1973)
- (7) Scott Donaldson, *By Force of Will* (Penguin Books, 1978)
- (8) Anthony Burgess, *Ernest Hemingway and his world* (Thames and Hudson, 1978)
- (9) James Nagel, (ed), *Ernest Hemingway: The Writer in Context* (The University of Wisconsin Press, 1984)
- (10) 石一郎編『ヘミングウェイの世界』(荒地出版社、1975)
- (11) 今村楯夫著『ヘミングウェイ』(冬樹社、1979)
- (12) 西尾巖著『ヘミングウェイ小説の構図』(研究社出版、1992)

## 参考文献

### 1. 主要作品

- (1) Ernest Hemingway, *In Our Time* (New York: Boni and Liveright, 1925)
- (2) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's Sons, 1926)

(提出日 平成 24 年 1 月 11 日)